立命館大学野球部の台湾遠征
―一九二七年の二勝二敗からみえるもの―

河原典史

Ⅰ はじめに

一八七二（明治五）年、日本に初めてベースボール（野球）が伝えられた。アメリカ人教師のホーレス・ウィルソンが、第一大学区第一番中学（現在の東京大学）で学生にベースボールを教えたのである。[1] その後、慶応大学[2]や早稲田大学[3]でも野球が行なわれた。当時の日本では、まず高等教育機関に野球が伝えられ、現在の大学がその中心を担うようになった。一方、野球道具の輸入を試みた平岡凞（ひろし）が率いた新橋アスレチック倶楽部など、各地の社会人野球部の活動も看過できない。やがて、大学野球部はその活動の場を海外にも求めるようになっていく。

一九〇五（明治三八）年、早稲田大学野球部がアメリカへ渡った。これは、日本の野球チームにおいて初めての海外遠征である。ワインドアップ投法をはじめ、野球発祥の地であるアメリカで最新の技術を習得して、彼らは帰国した。その後、一九〇八（明治四一）年に慶応大学はハワイ、一九一〇（明治四三）年には

早稲田大学がハワイ、そして翌一一（明治四四）年にはアメリカで野球技術を磨いた。同年には、慶応大学も再びアメリカへ遠征を行なっている。

関西地方で最も早く海外へ遠征した野球チームは、和歌山中学校である。同校は一九二七（昭和二）年、翌二八（昭和三）年には関西学院中学校がアメリカへ遠征している。[4] すなわち関西地方では、大学野球部に先んじて中学校の野球部が海外遠征を実施したのである。やがて、大学や中学の野球部は、当時の日本植民地であった台湾や朝鮮へも遠征をするようになった。

『台湾野球史』[5]によれば、台湾へ初めて遠征をした野球チームは早稲田大学で、それは一九一七（大正六）年である。翌年には法政大学、一九二二（大正一一）年には慶応大学と法政大学が台湾を訪れている。一九二三（大正一二）年には甲陽中学校が遠征をしており、やはり関西地方では中学の方が早期に訪台しているのである。同地方の大学で最も早く台湾へ遠征をしたのは、一九二四（大正一三）年の同志社大学で

第1表：台湾へ遠征した野球部

遠征年	遠征野球部	主催
1917（大正６）	早稲田大学	北部協会
1918（大正７）	法政大学	北部協会
1922（大正11）	慶応大学	３Ｋ商会
1922（大正11）	法政大学	南報
1923（大正12）	立教大学・甲陽中学	台北倶楽部
1924（大正13）	同志社大学	プロ団
1925（大正14）	長崎高商	台糖
1927（昭和２）	山口高商・立命館大学	黒洋倶楽部
1928（昭和３）	京都大学	台湾日日新聞
1929（昭和４）	慶応大学	台湾日日新聞
1930（昭和５）	早稲田大学	台湾日日新聞
1930（昭和５）	平安中学	合同新聞
1931（昭和６）	明治大学	台湾日日新聞
1931（昭和６）	小倉工業中学・広陵中学・神港商業中学・和歌山商業中学	新聞社合同

注：資料は1931年まで
出典：湯川充雄編『台湾野球史』、台湾日日新聞社運動具部、1932、6－9頁。

ある。その後も長崎高等商業学校や山口高等商業学校など、関西以西の中・高等商業学校の野球部が次々に台湾へ遠征したのである（第1表）。

台湾への遠征ではアメリカ大陸への場合とは異なり、野球の普及と植民地政策への活用に主眼が置かれたようである。例えば、現地の移民一世を中心とする日系コミュニティが援助したハワイ[6]やブラジル[7]などに対し、台湾では台湾日日新聞をはじめとする新聞社が主催する興行へと転化していった。このような経緯について、多くの大学の野球部史では当時のスコアや成績だけが記され、遠征の目的や経緯などについて述べられることは少ない。

このようななか、立命館大学野球部も一九二七（昭和二）年一二月に初めて海外（外地）への遠征として台湾を訪れた。残念ながら、まとまった野球部史が編まれていない立命館大学では、当時の記録は多くない。ただし、この台湾遠征については、前掲の『台湾野球史』をはじめ、いくつかの資料が残っている。本稿では立命館大学野球部の戦績だけでなく、この遠征をめぐる植民地期台湾の背景について、若干の考察を試みたい。

Ⅱ　台湾の遠征の企画

1．京都大学専門学校野球連盟戦と中川館長

一九二二（大正一一）年、旧制大学令によって私立立命館大学は大学に昇格した。同年に入学した小山恭

二と長村甚一（平安中学出身）ら一〇人は、翌年に野球部を結成した。[8] ただし、中学時代に野球を経験した部員はほとんどいなかった。一九二六（大正一五）年に大谷大学、龍谷大学、京都府立医科大学と京都薬学専門学校に立命館大学を加えた五校で、京都大学専門学校野球連盟が成立した。そして、同年春季に開催された第一回大会で、立命館大学は優勝した。創部初期から好成績を収めたのは、当時の社会人野球部の大毎ブレーブスと寝屋川球場、宝塚協会チームと宝塚球場で練習試合を重ねたからという。[9] その後、立命館大学で最初の留学生としてドイツから帰国したばかりの法学部教授・板木郁郎[10]が野球部の部長に迎えられた。

秋季の第二回大会から参加した京都帝国大学は同大会に続き、翌春の第三回大会も制覇した。そして、一九二七（昭和二）年秋、第四回大会を迎えた立命館大学は、京都府立医科大学を一六対八、大谷大学を九対五、京都薬学専門学校を八対三、さらに龍谷大学も八対六で連勝した。一〇月五日に行なわれた京都帝国大学戦を六対四で勝利を収めた立命館大学は、五戦全勝で二回目の優勝を果たした。[11] そして、創部時のメンバーが卒業する同年、その謝恩と優勝祝賀を兼ねて、部員有志が初めての遠征を企画したのである。[12]

部員が企画した遠征先は、館長に就任したばかりの中川小十郎の縁故ある台湾であった。一九〇八（明治四一）年より樺太庁副長官・部長を務めたのち、一九一二（大正元）年から一九二五（大正一四）年まで台湾銀行副頭取・頭取を歴任した中川館長[13]を知る台湾の人々に、新しく就任した立命館大学の活躍のひとつとして野球部の優勝を紹介したい、という意見があったようだ。そして、板木部長が台湾遠征の企画とその助成を中川館長に依頼したところ、それは快諾されたのである。[14] すなわち、早稲田大学野球部が同志社出身の安倍磯男部長によって創部、やがてアメリカに遠征をしたのと同様、大学の象徴的な人物の影響で野球部の

遠征先が決められていたことは興味深い。

2．遠征の準備と苦悩

中川館長の了解を受けた一二月初旬、野球部は京阪地域在住の校友から遠征費用の寄付を募ろうとした（第2表）。当初、比較的順調に進んでいた募金活動に対して、校友会幹事会にて「学校の依頼なき限り自今学友会諸部の寄付募集には一切応じない」との決議がなされた。[16] 部員の一部負担や、自分自身の名義での借金で遠征費を捻出しようとしていた板木部長は、中川館長へ事情説明の手紙を書いた。そして、以下の返事をもって、中川館長は費用の稔出について快諾したのである。「経費の点は自分に於て責任を持つ。問題はただ、渡台してあえて校名を汚さざるの確信ありや否やにある。もしこの確信あらば、渡台せよ」。

費用の調達と並行して遠征の日程、とくに対戦相手の問題があった。立命館中学を卒業した板木部長の恩師にあたり、当時では台中商業に勤めていたという某氏[17]に打診がなされた。台湾球界の権威者と自称した某氏の返信には、野球部の台湾遠征を歓迎し、試合予定表まで添付されていたという。しかし、その後に連絡が途絶えたため、板木部長は台湾体育協会会長・幹事、各都市の支部長などに依頼状を発送した。また、台北にある校友会支部幹事で、華南銀行文書課長の土井常太郎氏に連絡が取られ、一一月二三日には台湾在住の校友四名・同窓二名が野球部の台湾遠征を援助する旨の返信が得られた。

その後、板木部長と土井氏は頻繁に電報で連絡を取り合った。土井氏からの情報によれば、台湾体育協会と創部したばかりの台北実業野球団・黒洋倶楽部[18]が山口高商野球部[19]を招待することが先決していた。これま

第2表：立命館野球部の台湾遠征の準備

年月日	事　　項
1927年10月15日	第４回（秋季）京都大学専門学校大会に優勝。
	中川館長、台湾遠征を快諾し、校友会からの寄付活動を許可する。
10月中旬	台湾在住の某氏に連絡、一度は返事があったが、その後は連絡が途絶える。
	台北校友会支部幹事・土居常太郎氏に連絡。
11月23日	土井氏から返信があり、さまざま助言をうける。
11月下旬	台湾体育協会会長・幹事、各都市の支部長へ連絡
12月3日頃	大阪朝日新聞に後援を交渉するが、新聞紙上だけの後援に留まる。
7日	土井氏より、朝日新聞の後援成功を願う電報が届く。
12月初旬	京阪在住の校友から寄付を募る。
	しかし、校友会幹事会にて寄付募集に応じないことが決議される。
	最終的には、中川館長が遠征費用について了解。
10日	土井氏より電報が届く。台湾協会と黒洋倶楽部が山口高商を招待するので、立命館大学の訪台を見合わせるよう助言。
11日	台湾体育協会・黒洋倶楽部より、協力できない旨の電報が届く。
	山口高商の予定を鑑み、12月14日出発・台北で２、３試合・25、26日頃離台という試案を体育協会などへ返信。
	同夜、土井氏より返信。田島学長から台湾倉庫社長・体育協会野球部長への後援願を送信するよう助言。
	同じ頃、土井氏は中川館長へ体育協会の援助が困難である旨を連絡。
12日	中川館長、台湾見学として予定通り訪台するよう指示するとともに、台湾日日新聞・台湾銀行理事・殖産局長・内務局長・台湾総監・吾妻旅館ならびに2人の台湾人校友に援助依頼を送る。
	板木部長、14日午前8時京都駅集合を部員に連絡。
	同夜、土井氏、24日に神戸港を出発するよう指示。
13日	午前、土井氏、体育協会が山口高商・関西大学とともに立命館大学を招待することに変更。
	24日に関西大学とともに神戸港から出発、台湾では山口高商と同一行動をとるよう指示。
	午後、土井氏より14日の出発を見合わせるよう助言。
	板木部長、翌朝の京都駅・神戸埠頭での待機を部員に連絡。
14日	正午、東京滞在中の中川館長より、予定通り本日14日正午に神戸出港の瑞穂丸に乗船するよう指示。
	すでに出港した瑞穂丸に追いついて乗船するため、午後8時9分発の下関行特急に乗車。
15日	正午、門司に寄航中の瑞穂丸に乗船。

出典：板木郁郎「野球部台湾遠征の記」、立命館学誌 111、1928、7-15 頁。

で、台湾では官庁職員によって野球部が組織されていた。それに対し、黒洋倶楽部は商業に従事する愛球家によって組織化された。そして、創立にあたって援助した人物の一人が山口高商の卒業後に台湾倉庫に勤めた三巻俊夫[20]であった。

土井氏によれば、立教大学も訪台する予定[21]があるため、南台野球倶楽部も対戦相手と球場の確保が困難であるという。一二月一〇日の彼からの電報には、「台湾野球界を支配する体育協会、黒洋倶楽部が山口高商を招くにより……むしろ貴部の来台は妨害の喧嘩となるものと見られ、各地試合不可能につき、野球団としては見合わせてはいかが。返事待、中川先生へこの旨[22]」との一文があった。つまり、新設された黒洋倶楽部と縁故の深い山口高商の招待試合が優先されていたようである。そして翌日には、黒洋倶楽部会長の三井物産・津久井誠一郎[23]と台湾体育協会から、立命館大学の訪台には応じられない旨の厳しい電報が届いたのである。検討の結果、山口高商の遠征日程が一二月二七日から一月八日と判明したため、立命館大学では一九日出発という当初の予定を一四日に繰り上げ、二五・二六日頃に日本へ戻ることに変更した。その後、一日のうちに何回も日台間で電報が往復した。留学経験のある板木部長と、校友の土井氏の奮闘だけでなく、ついには野球部の遠征のため中川館長までが台湾総監・上山満之進[24]をはじめ、殖産局、内務局、台湾銀行や台湾日日新聞、さらには宿泊施設や台湾人校友などに連絡をとった。前職を台湾銀行頭取とする中川館長が、まさに台湾官僚や財界へ直談判したのである。

中川館長は、「台湾見物のつもりにて予定通り実行せよ[25]」と野球部に指示をした。それを受けた板木部長が、当初の予定通り一四日正午に神戸港を出港する瑞穂丸に乗船するべく、同日の午前八時に京都駅に集合する

旨を部員に伝えたのは、一二日の夕方である。ところが、その夜半に土井氏から二四日に出発するよう電報が届いた。翌朝には、台湾体育協会が山口高商と関西大学、そして立命館大学を招待することに変更した件と、二四日に関西大学と一緒に訪台し、その後は山口高商と同行するよう土井氏から指示があった。つまり、中川館長と土井氏の熱意ある行動は、台湾体育協会や黒洋倶楽部の幹部[26]たちに、自費による立命館大学の訪台を認めさせたのである。

すると、次の問題は出発日の決定である。出発予定の前日・一三日さえも、土井氏は二四日への変更を勧めてきた。すでに決定している山口高商を中心とする日程の再変更を、彼は懸念したのである。とりあえず板木部長は、予定通り一四日午前八時に京都駅および神戸港に集合する旨を部員に伝えた。しかし、最終決定がなされないまま出発当日・一四日を迎えると、東京滞在中の中川館長から当初の予定通り正午に神戸港を出港の瑞穂丸に乗船するよう、ほぼ同時刻に連絡が届いたのである。すでに出航した瑞穂丸に追いつくため、野球部は京都駅を午後八時九分に出発する下関行き特急[27]に乗車した。そして、翌一五日に後援の大阪朝日新聞社門司支局を訪問後、野球部は門司に寄航中の瑞穂丸に途中乗船できたのである。まさに、この日は京都大学専門学校大会の優勝からちょうど二ヶ月後であった。

一六日を船中で過ごした後、一七日の午後二時に台湾・基隆に着いた野球部は、列車で台北に午後三時三〇分に到着した（第3表）。まずは台湾神社に参拝後、台北秋季実業野球大会の決勝戦を観戦した部員は、土井氏をはじめ今回の訪台に援助を惜しまなかった台湾球界の重鎮が主催した蓬莱閣での歓迎会に出席[28]後、吾妻旅館[29]で台湾の初めての夜を迎えた。[30]

第3表：立命館大学野球部の台湾遠征の日程

年　月　日	事　　項	宿泊地
1927年12月14日	京都駅午後8時9分下関行特急3等車乗車 池田理事、運動具店や学生などの歓送	車中
12月15日	午前8時55分下関着、関門連絡船に乗船後、大阪朝日新聞門司支局訪問　門司12時、瑞穂丸に乗船	船中
12月16日	瑞穂丸船中	船中
12月17日	台湾・基隆に午後2時30分着、鉄道にて台北に午後3時30分着 自動車にて台湾神社に参詣、台北秋実業野球大会の決勝戦観戦　蓬莱閣にて歓迎会	吾妻旅館
12月18日	**円山球場にてＣＢ団と対戦、8対７で勝利**	吾妻旅館
12月19日	蓬莱公学校訪問 茶製造所・鐘泰家住宅・葉金塗住宅・淡水河を見学 鉄道にて台北を出発	車中
12月20日	午前5時嘉義に到着後、青柳旅館で朝食 鉄道にて阿里山へ移動	阿里山クラブ
12月21日	阿里山檜筏材場・蒐集所を見学 万年山・塔山登山、新高山を見学	阿里山クラブ
12月22日	神木・殖産局営林署製材所を見学 勝田医師宅訪問後、鉄道にて嘉義出発、午後７時15分高雄に到着	(高雄)
12月23日	早朝練習、挨拶回り 屏東の製糖会社を見学　夕方、高雄に戻る	(高雄)
12月24日	**嫩球場にて全高雄軍と対戦、７対８で敗戦** 午後7時に高雄を出発、台南に宿泊	浪花旅館
12月25日	安平・台南神社参拝 **台南一中校庭にて南台軍と対戦、６対17で敗戦**	(台南)
12月26日	第一鄭成功廟、五妃の墓、開帝廟や赤嶺楼台南公園など台南を見学　鉄道にて台北へ　北投に宿泊	(台北)
12月27日	黒洋倶楽部（台北体育協会）主催の歓迎会（鉄道ホテル）に山口高商とともに臨席 北投温泉（台銀クラブ）へ行く	(台北)
12月28日	北投見物後、吾妻旅館で宿泊	吾妻旅館
12月29日	**円山球場にて鉄団と対戦、６対１で勝利** 蓬莱閣にて歓迎会に臨席	吾妻旅館
12月30日	雨天のため、専門学校連合軍との試合順延 總督府・樟脳阿片の製造工場を見学	吾妻旅館
12月31日	専門連合軍より試合中止の申出、これを受理	吾妻旅館
1928年１月１日		吾妻旅館
１月２日	雨天のため、ＣＢ団との試合中止 鉄道ホテルでの招待会に臨席	吾妻旅館
１月３日	基隆の顔氏邸へ 午後2時顔氏邸を出発、基隆より信濃丸に乗船	船中
１月４日		船中
１月５日		船中
１月６日	午後3時に門司へ入港、午後8時の船で出航	船中
１月７日	午後3時に神戸へ入港、午後7時に京都駅に到着	

注１：太字は試合結果　注２：宿泊地の（　）は推察

出典：河隈恭二「台湾に臨みて」、立命館学誌 112、1928、5-16 頁。

Ⅲ　台湾遠征での戦績

1．遠征メンバーと戦績

立命館大学野球部の台湾遠征のメンバーは板木部長以下、第4表の通りである。実質的に指揮をとったのは、主将である芝茂夫であろう。ピッチャー（投手）である彼は、一九二三（大正一二）年の全国中等学校野球大会における甲陽中学校の優勝時にセンター（中堅手）として活躍した。そして彼は、同年一二月に中等学校野球部として初めて台湾に遠征した同チームの一員でもあった（第1表）。この点も、立命館大学野球部が台湾遠征を実施した遠因となろう。サード（三塁手）の井村信正もまた、同中学校出身である。ピッチャー（投手）は松蔭暁と川中、キャッチャー（捕手）は東田勇次郎など、出身地をみると福岡県明善高校出身のレフト（左翼手）北川久三を除けば、ほとんどは関西地方の中学出身者で

第4表：立命館大学野球部名簿

部長　　板木　郁郎　　法学部法律学科主事

ポジション	選手名	学部	卒業年	出身中学校	卒業後の進路
ピッチャー	芝　茂夫	法学	1931	甲陽(兵庫県)	享栄高校教諭
	松蔭　暁	—	—	東山(京都府)	—
	川中	—	—	—	—
キャッチャー	東田　勇次郎	法学	1931	神戸第二(兵庫県)	国鉄吏員
ファースト	今小路　明磨	経済学	1931	平安(京都府)	—
セカンド	田中　良三	経済学	1932	大谷(京都府)	—
	松村　秀光	—	—	立命館(京都府)	京都瓦期会社
サード	井村　信正	経済学	1928	甲陽(兵庫県)	大阪染料会社
ショート	井堂　五男士	経済学	1932	同志社(京都府)	—
レフト	北川　久三	経済学	1929	明善(福岡県)	—
センター	小笹　清一	法学	1932	平安(京都府)	—
ライト	長村　甚一	経済学	1928	平安(京都府)	—
マネージャー	河隅　恭二	経済学	—	—	—
	早川　登生	法学	1931	東山(京都府)	住宅営団

出典：早川登生「立大野球部台湾遠征前期」立命館学誌、1928、112、2-5頁。
立命館大学『昭和参年拾貳月調査　校友会名簿』、1928。

ある。ただし、立命館中学出身者はセカンド（二塁手）の松村秀光一人でしかない。なお、前掲の『台湾野球史』には、「河隅・早川両監督」という記述が多用されているが、彼らはマネージャーとして、この遠征だけではなく野球部の総務を担ったのであろう。

当時の台湾には、さまざまな野球チームがあった。そのいくつかは台湾総督府の鉄道局や通信局からのクラブチームであり、最終的に立命館大学はそれらの四チームと試合をした。台湾で最初の試合は、一二月一八日午後一時三〇分より円山球場[31]で行なわれたＣＢ団戦[32]である（第５表）。二回に先攻のＣＢ団に先制点を許し、三回に追加点を奪われたものの、その裏に立命館大学は同点に追いついた。六回にＣＢ団が二点を追加すると、その裏に立命館大学は大量六点を入れた。九回表にＣＢ団は三点を返すが、八対七で逃げきった立命館大学は、台湾の初戦を飾ったのである。なお、試合の翌日から一週間、野球部は台湾各地を見学した（第１図）。見学地は阿理山をはじめとする各地の檜筏流し場、伐木場などであり、当時のツーリズムについて興味深い点がみいだせる。

第二試合については、一二月二四日午後二時一〇分より高雄市グランド[33]で全高雄軍戦[34]が行なわれた（第６表）。二回裏に三点を入れて先制した立命館大学は、直後の三回表に追いつかれたがその裏に二点を追加し、再びリードを奪った。中盤には均衡が続いたものの、九回表に全高雄軍に大量六点を入れられた立命館大学は、九対五でゲームを失った。長旅による疲労も考えられるが、一八日の第一試合においてキャッチャー東田の負傷が直接的な敗因であろう。この試合からはセンター（中堅手）の小笹がキャッチャーを務めたためか、攻守にやや精彩を欠いたのである。

第５表：対 CB 戦の詳細

その１：スコア

回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
CB	0	1	1	0	0	2	0	0	3	7
立命館	0	0	2	0	0	6	0	0	×	8

その２：試合の経過

打順	守備	CB	1	2	3	4	5	6	7・8	9
1	6	吉　開	三安		右安		二失	遊ゴ	記述なし	
2	4	鮫　島	三ゴ		遊ゴ失		四球			遊失
3	3	斑　月	右飛※1		四球		凡打			一失
4	8	杉　山		左安（得点）	四球		凡打			凡打
5	7	桐　野		中飛失	凡打※3			左安（得点）		中本（打点3・得点）※4
6	2	安　田		遊ゴ野選		三ゴ		遊失（得点）		中飛
7	9	津　曲		三振		遊ゴ		遊ゴ(6-3)		
	9	松　北								
8	1	中　村		一ゴ(打点)※2		三振		投飛		
	1	山　田								
9	5	有　田			三失		三ゴ	二ゴ失		

打順	守備	立命館	1	2	3	4	5	6	7・8	9
1	8→2	小　笹	二ゴ		投失		三振	遊ゴ	記述なし	
2	5	井　村	二ゴ		三振		左飛	四球		
3	9	長　村	遊ゴ		四球押し出し			左中本（得・打）		
4	2	東　田		四球						
		松　蔭			犠打（打点）			遊失（得点）		
5	6	井　堂		遊ゴ(6-4)	凡打			投犠（得点）		
6	7	北　川		右飛		三振		一野選（打・得）		
7	3	今小路		中飛		左安		一安（打・得）		
8	4	松　村			左安（得点）？	二飛（併殺）		左安（打点2・得）		
9	1	芝			四球（得点）		遊ゴ			

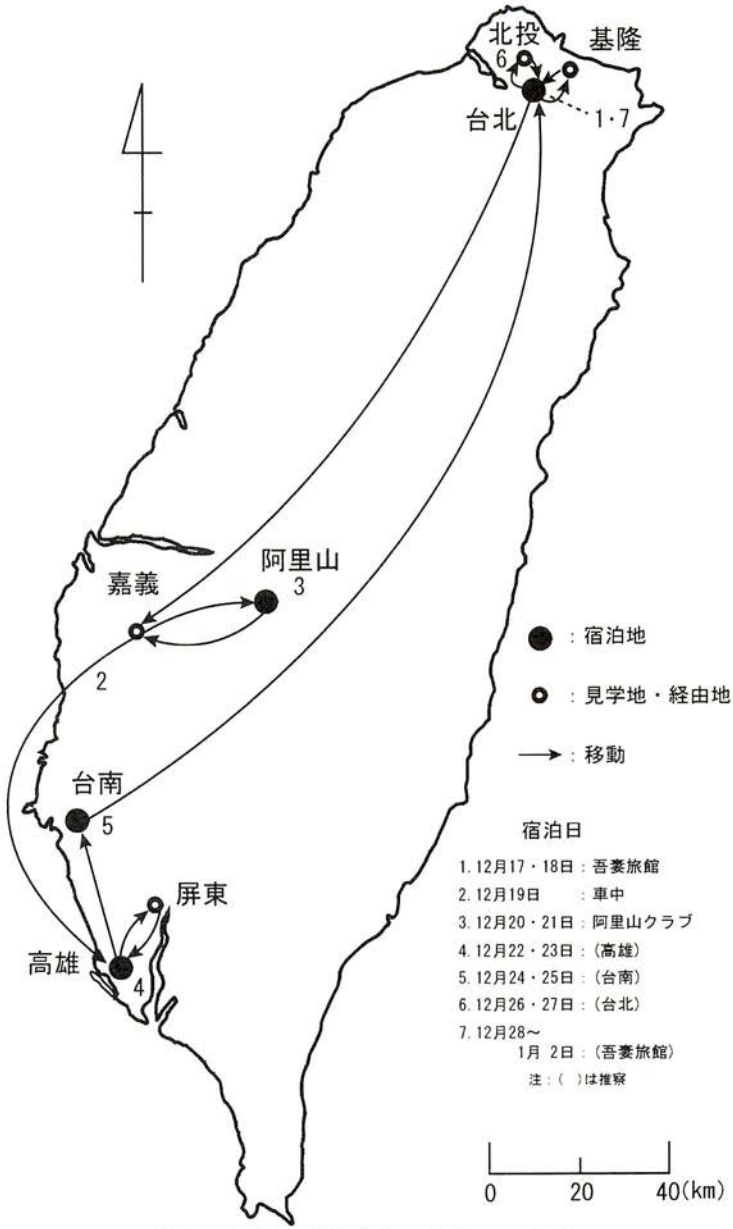
その３：選手別成績

CB	打数	得点	安打	四死球	三振	盗塁	犠打	失策
吉　開	5	1	2	0	0	0	0	1
鮫　島	3	1	0	1	0	1	1	1
斑　月	4	1	0	1	0	2	0	0
杉　山	4	1	1	1	0	0	0	0
桐　野	5	2	2	0	0	0	0	1
安　田	5	1	0	0	0	0	0	1
津　曲	3	0	0	0	1	0	0	0
松　北	1	0	0	0	0	0	0	0
中　村	1	0	0	0	1	0	1	0
山　田	1	0	0	0	0	1	0	0
有　田	4	0	0	0	0	0	0	1
計	36	7	5	4	2	4	2	5

立命館	打数	得点	安打	四死球	三振	盗塁	犠打	失策
小　笹	4	0	1	0	1	0	0	2
井　村	3	0	0	1	1	1	0	1
長　村	3	1	1	1	1	0	0	0
東　田	0	0	0	1	0	0	0	0
松　蔭	2	1	0	0	0	1	1	0
井　堂	3	1	1	1	0	2	0	3
北　川	4	1	1	0	2	1	0	0
今小路	4	1	2	0	1	1	0	1
松　村	4	2	1	0	0	0	0	2
芝	3	1	1	1	0	0	0	0
計	30	8	8	5	6	6	1	9

※１　おそらく、２塁からタッチアップ失敗の併殺
※２　一ゴロで２塁走者本塁タッチアウト
※３　ノーアウト１・２塁からエラーの間に本塁タッチアウト。１・３塁から２盗失敗の間に３塁ランナー生還。桐野はおそらく凡打？
※４　ランニングホームランか

出典：早川、1928。以下、第６・７・８表も同じ



第１図　立命館野球部の台湾での移動

出典：河隈恭二「台湾に臨みて」立命館学誌112、1928、5－16頁

翌二五日、立命館大学は台南一中校庭[35]において台南軍と対戦した（第7表）。一回に二点を入れて先制したものの、立命館大学はその裏に五点を失い、二回に二点、四回に二点、五回にも三点を追加された。さらに七回に四点、八回に一点を加点された彼らは九回表に三点を返すものの、一七対六で大敗したのである。再び台北に戻った立命館大学は、一二月二九日の午前一〇時四〇分より円山球場で鉄団[36]と対戦をした（第8表）。負傷の癒えた東田がキャッチャーに戻ったこともあり、鉄団の攻撃を二回の一点のみで押さえた立命館大学は、一回に先制点を入れた後も追加点を重ね、六対一で勝利を収めたのである。

四試合の総合成績をみると、興味深い点がいくつかある（第9・10表）。チーム打率が二割未満と現在に比べて打率が低く、エラー（失策）が極めて多い。詳細まで留意すると、送球ミスによる進塁が多いことから、現在のように他の選手によるベース・カバーリングの技術が劣っていたようである。また内野ゴロでの併殺が少なく、打者走者のみをアウトにすることから、ダブルプレーの技術が必ずしも高次だったとは思えない。さらに、盗塁数が多い点から、ピッチャーの牽制・クイック投法、ならびにキャッチャー（捕手）のキャッチング・スローイング技術も低次と思われる。

なお、スコアの記載方法については、ライナーの記述がないため、飛球においてフライとの区別に注目していなかったようである。さらに、審判が一人であることも多く、現在のように四人あるいは六人が配置される試合は稀有であった。「三人も必要がない」という記述[37]からは、審判が重要視されていなかったことと、適任者が不足していたことが考えられる。

第６表：対高雄戦の詳細

その１：スコア

回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
高雄	0	0	3	0	0	0	0	0	6	9
立命館	0	3	2	0	0	0	0	0	0	5

その２：試合の経過

打順	守備	高雄	1	2	3	4～8	9
1	4	井　村	中安		四球（得）	記述なし	遊ゴ（得）※8
2	6	武　藤	中飛		左安（打・得）※6		捕邪飛
3	2	上　野	中飛		二飛		中安（打２・得）
4	5→1	稲　生	四球※1		中犠飛（打）		左安（得）
5	1→8	内　堀	遊ゴ		遊ゴ失		三ゴ失（得）
6	9→3	大　澤		三振	二飛		右２（打２・得）
7	8	館　野		三ゴ			遊ゴ失
8	3→5	肥　田		遊口？			※9
	3	倉　本					四球（得）
9	7	八文字			中安（得）※5		三ゴ失

打順	守備	立命館	1	2	3	4～8	9
1	2	小　笹	投ゴ	遊ゴ失※4		記述なし	四球
2	8	松　薩	左安※2	左飛			四球
3	9	長　村	左飛		投ゴ		三振
4	6	井　堂	遊ゴ（6-5）		捕邪飛		
5	5	井　村		四球（得）※3	左本（打・得）		
6	3	今小路		犠打	死球（得）※7		
7	7	北　川		犠打（打）	四球		
8	4	松　村		四球（得）	左安（打）		投ゴ
9	1	芝		四球（得）	左飛		四球※10

その３：選手別成績

高雄	打数	得点	安打	四死球	三振	盗塁	犠打	失策
井　村	4	2	2	2	0	2	0	0
武　藤	5	1	1	0	0	1	0	1
上　野	5	1	1	0	0	0	0	0
稲　生	3	1	1	1	0	0	1	0
内　堀	5	1	1	0	0	0	0	0
大　澤	5	1	2	0	1	0	0	0
館　野	4	0	0	1	0	1	0	0
肥　田	2	0	0	0	0	0	0	0
倉　本	0	1	0	2	0	0	0	0
八文字	3	1	1	0	0	1	0	0
計	36	9	8	6	1	5	1	1

立命館	打数	得点	安打	四死球	三振	盗塁	犠打	失策
小　笹	4	0	0	1	0	2	0	0
松　薩	4	0	1	1	1	1	0	0
長　村	5	0	0	0	1	0	0	1
井　堂	4	0	0	0	0	0	0	2
井　村	2	2	2	2	0	2	0	1
今小路	2	1	0	1	0	1	1	0
北　川	2	0	0	1	0	0	1	1
松　村	3	1	2	1	0	2	0	1
芝	1	1	0	3	0	0	0	0
計	37	5	5	10	2	8	2	6

※1　１・３塁になる
※2　２盗成功
※3　２盗成功
※4　２人生還
※5　２盗成功
※6　２盗成功
※7　２盗成功
※8　遊撃手から二塁手へのフォースプレイで１・３塁になる
※9　以後、記述なし
※10　２盗失敗

第７表：対全台南戦の戦績詳細

その１：スコア

回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
立命館	2	0	0	1	0	0	0	0	3	6
全台南	5	2	0	2	3	0	4	1	×	17

その２：試合の経過

打順	守備	立命館	1	2・3	4	5	6	7	8	9
1	2	小　笹	?	記述なし		記述なし				
2	7	北川	?							
3	9	長　村	四球（得）							
4	6	井　堂	左２（得）							
5	5	井　村	左安(打2)							
6	3	今小路	※1							
7	8	松　薩			↓２死後					
8	4(3回交代)	松　村			左失（得）※4					
	1(3回～)	芝								
9	1(先発)→4	田　中			二ゴ失※4					

打順	守備	全台南	1	2・3	4	5	6	7	8	9
1	2	鈴　木	左本(打・得)	記述なし	遊安（得）	失（得）	記述なし	安（得）	記述なし	
2	3	濱　崎	三失（得）		四球（得）	失（得）		安（得）		
3	8	内　山	右安（得）		凡打？	以後記述なし		本塁打(打3・得)		
4	5	浅　尾	一ゴ（得）※2		右安(打2)			本塁打(打・得)		
5	7	池田曾	二ゴ失(得※3)		以後記述なし			以後記述なし		
6	9	河　田	三飛							
7	4	池田普	投ゴ							
8	1	金　子	三振			二安中※5(打・得)				
9	6	井野邊				?		↓一死後		

その３：選手別成績

立命館	打数	安打	四死球	三振	盗塁	犠打	失策
小　笹	5	0	0	2	0	0	1
北　川	5	0	0	2	0	0	0
長　村	4	1	1	0	0	0	0
井　堂	5	1	1	0	0	0	1
井　村	3	1	0	0	0	0	2
今小路	4	2	0	1	1	0	0
松　薩	4	0	0	0	0	0	3
松　村	1	1	0	0	0	0	1
芝	3	0	0	0	0	0	0
田　中	3	0	1	1	0	0	3
計	37	6	3	6	2	0	11

全台南	打数	安打	四死球	三振	盗塁	犠打	失策
鈴　木	6	4	0	0	0	0	0
澤　崎	5	2	1	0	0	0	0
内　山	6	2	0	0	0	0	0
浅　尾	5	2	1	0	0	0	0
池田曾	5	1	0	2	1	0	1
河　田	4	1	1	0	0	0	0
池田普	5	0	0	0	0	0	3
金　子	4	1	1	3	0	0	1
井野邊	5	1	0	0	0	0	2
計	45	14	4	5	1	0	7

※１　以後、記述なし
※２　おそらく二塁手の野選
※３　３盗成功後に、三塁手の失策
※４　田中の２盗の間に松村が生還
※５　おそらく強襲ヒットがホームランに

第８表：対鉄団戦の詳細

その１：スコア

回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
鉄団	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
立命館	1	1	3	0	1	0	0	0	×	6

その２：試合の経過

打順	守備	鉄団	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1	9	本　多	三振	投安?失?(打)			三者凡退		遊ゴ		三飛
2	6	大　塚	左安	三振					一飛		中飛
3	3	田　子	遊ゴ(6-4)※1	遊飛						凡打？	
4	5	鳥　居	遊□※2		投ゴ			中?右?安		中安	
5	8	山　崎	四球		三邪飛			四球		凡打	
6	4	水　舎	遊ゴ		遊ゴ			捕ゴ(2-3)		凡打	
7	2	平　山		左２(得)		三者凡退		投飛			遊安※5
8	1	長　山		三安※1				一ゴ			四球
9	7	黒　川		遊ゴ					三振		
	P.H	芥　川									三ゴ(5-2)

打順	守備	立命館	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1	8	小　笹	右本(打・得)	四球		凡打		二失※1		遊失※1	
2	4	松　村	三振	遊失		凡打		遊ゴ		遊飛	
3	9	長　村	右飛	右飛		遊安		捕飛		左飛	
4	6	井　堂	四球		四球(得)	凡打		中飛			
5	5	井　村	四球		三振		死球(得)		凡打		
6	7	北　川	三振		四球(得※4)		二ゴ(4-3)		四球		
7	2	東　田		三(捕?失?)※4	1ゴ失(打・得)		右安(打)		四球		
8	3	今小路		四球(得)	捕ゴ(打)		以後凡打		中飛		
9	1	芝		投ゴ(1-3)	三振				捕ゴ		

その３：選手別成績

鉄団	打数	得点	安打	四死球	三振	盗塁	犠打	失策
本　多	5	0	0	0	1	1	0	0
大　塚	5	0	0	0	1	0	0	2
田　子	4	0	0	0	1	1	0	0
鳥　居	4	0	2	0	0	1	0	0
山　崎	2	0	0	2	0	0	0	0
水　舎	4	0	0	0	0	0	0	2
平　山	4	1	1	0	0	0	0	1
長　山	3	0	1	1	0	1	0	0
黒　川	3	0	0	0	2	0	0	0
芥　川	1	0	0	0	0	0	0	0
計	35	1	4	3	5	4	0	5

立命館	打数	得点	安打	四死球	三振	盗塁	犠打	失策
小　笹	4	1	1	1	0	2	0	0
松　村	5	0	0	0	1	0	0	1
長　村	5	0	1	0	0	0	0	0
井　堂	2	1	0	2	0	0	0	0
井　村	2	1	0	2	1	0	0	0
北　川	2	1	0	2	1	1	0	0
東　田	3	1	2	1	0	0	0	0
今小路	3	1	0	1	1	0	0	0
芝	4	0	0	0	1	0	0	0
計	30	6	4	9	5	0	3	1

※１　２盗成功
※２　野選、安打か失策？
※３　２盗失敗
※４　捕手失策（おそらくパスボール）
※５　牽制球の悪送球で１塁ランナーは３塁まで進塁

3．台湾球界への寄付

一二月二七日、台湾に到着した山口高商と主催者の黒洋倶楽部とともに、立命館大学は鉄道ホテルで開催された歓迎会に臨んだ。三十日には、山口高商を中心とする専門学校連合軍[38]との対戦が予定されていたが、雨天のため翌日に順延された。しかし、当日になると選手に欠員が生じたとの理由で、試合は中止になったのである。[39] 年明けの一月二日、再び雨天のためCB団との試合も中止になった。すなわち、日本からの連絡が徹底されていなかったためか、立命館大学の試合日程は極めて流動的であった。[40] そのようななか、二勝二敗、そして三試合が中止になったのである。

ところで、立命館大学は観客の試合観戦を無料とすることを主張したが、これは受

第 9 表：立命館大学野球部の通算成績

対戦チーム	打数	安打	得点	四死球	三振	犠打	失点	被四死球	失策	チーム打率
CB	30	8	8	5	6	1	7	4	9	
高雄	37	5	5	10	2	2	9	6	6	
全台南	37	6	6	3	6	0	17	4	11	0.172
鉄団	30	4	6	9	5	3	1	3	1	
合計	134	23	25	27	19	6	34	17	27	

出典：早川、1928。

第 10 表：立命館大学野球部の選手別成績

	対 CB 戦	対高雄戦	対全台南戦	対鉄団戦	通算成績	打率
小　笹	4－1	4－0	5－0	4－1	17－2	0.118
井　村	3－0	2－2	3－1	2－0	10－3	0.300
長　村	3－1	5－0	4－1	5－1	17－3	0.176
松　蔭	2－0	4－1	4－0		10－1	0.100
井　堂	3－1	4－0	5－1	2－0	14－2	0.143
北　川	4－1	2－0	5－0	2－0	13－1	0.077
今小路	4－2	2－0	4－2	3－0	13－4	0.308
松　村	4－1	3－2	1－1	5－0	13－4	0.308
芝	3－1	1－0	3－0	4－0	11－1	0.091
田　中			3－0		3－0	0.000
東　田				3－2	3－2	0.667

注：（○－○）の右は打数、左は安打数

出典：早川、1928。

け入れられなかった。その理由は、無料にすれば、後日に訪台する山口高商の試合を有料とすることが困難だからであった。四試合で得た収益金は五百円を数えたが、その用途について野球部は大学当局に相談した。その結果、実費との差額である四百円を台湾球界に寄付することが決定した。台湾を離れる前日の一月二日、中川館長の名において関係者への感謝会が催された。その席上で、板木部長は以下の言葉とともに、黒洋倶楽部会長の津久井氏に寄付の手続きを行なったのである。「一行は台湾見学のため渡台したもので、中川館長の意見もあり入場料に依る収益を受くべきものでないから、其の好意だけ受け、右の金子は台湾球界発展のために改めて寄付したいからしかるべく処分請う」。[41] 以上のような経緯を経て、一九二八年一月三日、基隆より信濃丸に乗船し、立命館大学野球部は帰国の途についたのである。門司・神戸港を経て彼らが京都駅についたのは、七日の午後七時であった。

Ⅳ．近代日本のスポーツ交流―おわりにかえて―

立命館大学野球部が台湾に遠征した背景には、館長・中川小十郎の存在があった。また、台湾野球界と山口県出身者との関係性や、出発前の紆余曲折のため、試合と同等以上の見学が日程に組まれていたのも特筆される。もう一点、興味深い事実がある。台湾遠征に参加したメンバーに小笹、長村と今小路の平安中学出身者が三人いる。遠征二年前の一九二五（大正一四）、年台湾東岸の花蓮にある野球団が日本に遠征をした。そのメンバーのほとんどは、原住民アミ（阿美）族からなっていた。花蓮港庁庁官の江口良三は同地方省の

状態を知ってもらうため、当時の日本と台湾の両方において人気を博していた野球チームの遠征とその活用を思いついた。そして、アミ族をメンバーとする野球チームである能高団が結成され、日本へ遠征をしたのである。[42] このチームは、京都円山公園をはじめとする各地で大阪府立八尾中学校などと試合をし、好成績を収めた。この試合を見学していた平安中学校の野球部関係者が、アミ族の活躍に注目した。そして花連港にある西本願寺別院住職・武田善俊の手引きにより、そのチームのなかから、後の伊藤次郎（ロードフ）、西村喜章（キサ）と稲田照天（アセン）の三人が平安中学校に入学したのである。[43] このような経緯を上級生として体験した三人の平安中学出身者は、どこかで台湾野球の将来性を立命館大学に伝えていたに違いない。

台湾や朝鮮、やがて満州への大学・社会人の野球部の遠征を追うと、アメリカ本土ならびにハワイを通じて日本に入ってきたベースボール、やがて野球がいかに日本植民地に普及していったのかという歴史・社会・経済的な背景を読みとる必要性が問われる。[44] これまでの日本野球史において、アメリカ（ハワイ）とのかかわりについては、学界のみならずジャーナリズムでも報告が蓄積されてきた。にもかかわらず、日本植民地における野球の展開については、必ずしも十分ではない。そこで本稿では、特定の出身者が植民地における野球活動にまで影響を及ぼしていたことを指摘した。今後は、一九三二（昭和七）年に上海、翌年には満州へ遠征し、立命館大学野球部[45]の軌跡を追うことから、現地の野球チームの創設をめぐる社会的背景とその経済活動についての歴史地理学的研究も進められる。また、立命館大学野球部で活躍した後に満州鉄道に就職した朝鮮出身者が、第二次世界大戦直後（解放後）の一九四六年のソウルで韓国（朝鮮）代表チームの一人としてアメリカ軍との親善試合に出場している。[46] 台湾や朝鮮からの立命館大学への留学生については、野球

部をはじめとするスポーツの交流も見いだせる可能性がある。これらについては、次の課題としたい。

（付記）

資料収集にあたって、財団法人・野球体育博物館、山口大学東亜経済研究所、平安中学・高等学校、ならびに立命館百年史編纂室には多大なご高配を承りました。また、資料の整理にあたっては、立命館大学文学部地理学専攻の津田恭明・藤信有蔵の両君にお手伝いいただきました。末尾ながら記して、お礼申しあげます。

なお、本研究において、平成一八～平成二一年度科学研究費・基盤Ａ「環太平洋をめぐる日本人の国際移動に関する学際的研究（代表者・米山裕）」と、立命館大学学術フロンティア推進事業の一部を使用しました。

(1) 日本へのベースボール（野球）の伝来については、大和球士編『真説　日本野球史―明治編―』、ベースボール・マガジン社、一九七七、一―三一〇頁。坂上康弘編『にっぽん野球の系譜学』、青弓社、二〇〇一、一―二四一頁。渡辺融「日本における野球の受容・定着過程」、（中村敏雄編『スポーツの伝播・普及』創文企画、一九九三、一一―二〇頁）。佐山和夫編『明治五年のプレーボール　初めて日本に野球を伝えた男―ウィルソン』、ＮＨＫ出版、二〇〇二、一―二二一頁など。

(2) 慶応義塾大学野球部史編集委員会編『慶応義塾大学野球部百年史・上巻』、三田倶楽部、一九六〇、一―四七五頁。以下、慶応大学の野球史については同書による。

(3) 飛田忠順編『早稲田大学野球部五十年史』、早稲田大学野球部、一九五〇、一―五一二頁。以下、早稲田大学野球史につい

ては同書による。

(4) 永田陽一『ベースボールの社会学』、東方出版、一九九四、三二八―三三二頁。

(5) 湯川充雄編『台湾野球史』、台湾日日新聞社運動具部、一九三二、一―七八二頁。編者の湯川は台湾日日新聞記者であり、同書のほとんどは、彼が執筆したと思われる野球記事が再録されたものである。以下、台湾の野球史については同書による。

(6) 後藤鎭平編『布哇邦人野球史（野球壹百年祭記念）』、布哇邦人野球史出版会、一九三〇、一―七七二頁　奥泉栄三郎監修『初期在北米日本人の記録　布哇編　第九冊・布哇邦人野球史　野球壹百年祭記念』文生書院、二〇〇四、復刻）。

(7) 聖州野球連盟編『ブラジル野球史　上巻』、伯国体育連盟、一九八五、一―二九二頁。

(8) 一．創設二〇周年記念事業実行委員会編『立命館大学体育会ＯＢ会』、立命館大学体育会ＯＢ会二〇〇一、一〇五頁。ただし、二．板木郁郎「野球部台湾遠征の記」立命館学誌一一一、一九二八、七―一五頁、によれば、当初の部員数は九名としている。

(9) 以下、台湾遠征の経緯については、前掲(8)―二．によるところが多い。

(10) 島根県出身の板木は、一九一九（大正八）年に立命館中学校を卒業後、京都大学法学部・大学院で民法を学んだ。大学令（旧制）による昇格後、立命館大学は専任教授体制の樹立が必要とされた。そこで、本学関係者を専任とし、対象者を留学生として派遣することになった。選出された板木は、一九二三（大正一一）年八月から一九二五（大正一〇）年三月までドイツに留学し、その後にヨーロッパを巡って帰国した。立命館大学五十年史編纂委員会編『立命館創立五十年史』二二〇―二二二頁。なお、板木は、一九四三（昭和一八）年に立命館大学を依願退職し、戦後に復職している。戦時中、板木部長は野球部の教え子である杜欣一氏（後掲(46)）を頼って、東亜バルブ株式会社に勤務した。板木　正『「親父の背中」に垣間見たその思想と信条』立命館百年史紀要一四、二〇〇六、二二三―二三一頁。

(11) 小早川昇三「京都大学野球リーグに立命館大学の覇業成る」野球界七〇―一四、一九二七、四八―四九頁。

(12) 小早川登「野球部の今昔」立命館学誌一六九、一九三四、一〇―一三頁。当時、立命館大学野球は、「未だ遠征をした事のないチーム」という評判があったという。前掲(8)―二、七頁。

(13) 立命館・中川小十郎研究会会報「中川小十郎先生の経歴」、一一、一九八五、一四―二九頁。

(14) 板木部長によれば、「運動嫌の館長のことだから―もっともこれは私の僻目かも知れないが―おそらくは一言の下に拒否せられるであろうことを案じ…」という一文から、遠征が許可されるとは思われなかったようである。前掲(8)―二、八頁。

(15) 同志社普通学校を卒業した安部磯男は、一八九一（明治二四）年にアメリカのハートフォード神学校に留学した。帰国後、彼は東京専門学校（後の早稲田大学）の講師、教授となり、留学中に知見した野球を伝えた。前掲(2)。同志社大学体育会硬式野球部・同志社大学野球部ＯＢ会編『同志社大学野球部史―前編』、一九九三、一八頁。

(16) なお、同年四月の学友会会則改正時に、「一切の対外的活動において部長の承認を得ることを要す」という一条が設けられ、学生だけの任意的な寄付金募集は禁じられていた。前掲(8)―二、八頁。以下、引用文の一部については、旧字体を新字体に改めた。

(17) 前掲(8)―二、にはアルファベットで某氏の名前が記されている。ただし、立命館大学編『校友名簿』一九二八、には、該当するアルファベットの台湾在住者は見当たらない。

(18) この野球部の事務所が台湾日日新聞社内におかれたことから、両者の繋がりが理解される。前掲(5)、六三七頁。

(19) 幕末に創設された文学私塾・山口講堂は、山口明倫舘・山口中学・山口高等中学校・山口高等学校を経て、一九〇五（明治三八）年に山口高等商業学校に改称された。野球部は、一八八九（明治二二）に創部された。中・四国地方の高等学校や

高等商業学校のほか、同部は一九一一（明治四四）年には三井物産門司支部や舞鶴倶楽部などの社会人野球部とも対戦している。これは、校風から実業界に多くの卒業生が輩出していたからであろう。作道好男・江藤武人編『花なき山かげの―山口大学経済学部六十五年史―』、財界評論新社、一九七〇、三七八―四二三頁。

(20) 前掲(5)、一一〇頁。

(21) 立教大学と、後述する関西大学の訪台は中止になった。

(22) 前掲(8)―二、一一頁。

(23) 前掲(5)、一〇五頁。

(24) 一九二六（大正十五）年七月から二八（昭和三）年六月まで台湾総監を務めた上山満之進もまた、山口県出身者である。

(25) 前掲(8)―二、一二頁。

(26) 中川館長と土井氏の電報に現れる台湾野球界の重鎮は、以下の通りである。三巻俊夫（台湾体育協会理事・黒洋倶楽部・台湾倉庫）、河村徹（台湾体育協会理事・黒洋倶楽部評議員・台日新報社）、吉田勉（黒洋倶楽部評議員・台湾銀行）、三次徳次郎（黒洋倶楽部評議員・実業）、許丙（台湾体育協会理事）

(27) 当時、国鉄の特急には、まだ愛称は付いていなかった。

(28) 歓迎会の写真には、板木部長をはじめとする立命館野球部と前掲二七の人物など、合計二九人が名前を添えて写っている。河隅恭二「台湾に臨みて」、立命館学誌一一一、一九二八、六頁。

(29) 当初は、台湾銀行の社宅か寺院で宿泊する計画であったが、前掲(26)の三次氏の紹介で高級旅館の吾妻旅館に合計一〇泊することになった。前掲(8)―二、一三頁。

(30) 前掲(28)をはじめ、部員の手記については、八人が台湾遠征での体験について『立命館学誌』一一一、一九二八に寄稿している。以下、台湾での戦績については、これらと前掲(5)を参考にした。なお、学生のまなざしからの台湾のツーリズムについては別稿を改めたい。

(31) この球場は一九二三（大正一二）年、摂政宮殿下が訪台の時、急造された球場である。西脇良明編『台湾中等学校野球史』、一九九六、三頁。

(32) この野球部は、一九二七（昭和二）年四月に台湾総督府通信部によって組織された。チーム名称は、Correspondence Boysの略称と思われる。前掲(5)、六三七頁。

(33) 立命館大学の訪台一年後の一九二八（昭和三）年には、市区改正のため、球場として使用できなくなった。前掲(31)、一九九六、四頁。

(34) おそらく高雄にあった嫩団や台糖など、数チームの合同チームであろう。

(35) 大正期には台南球場が使用されていたものの、当時では台南一中校庭が野球場として使用されていた。前掲(31)、四頁。

(36) この野球部は、一九〇二（明治四五）年四月に台湾総督府鉄道局によって組織された。前掲(5)、六三七頁。

(37) 一九一五（大正四）年の台湾南部大会の総評に「今度の争奪戦には三人の審判が付いた。これは日本では従来耳にしたことはない。おそらくレコード破りであろう。ただし三人の審判はあまりに行々しい、三人も付けなければ満足に判定することができないかと思うと何だが、南部野球の恥になるような気がする。」という記述がある。前掲(5)、一八七頁。

(38) 連合軍の陣容については、記録がない。

(39) 山口高商は、台湾遠征で五勝二敗の成績を収めた。吉本岩太郎編『山口高商学友会報』、一九二八、二〇五―二〇六頁。な

お、CB戦・〇対四、台南戦・八対四、サウス戦・二二対二、全高雄戦（第一試合）・一二対一、（第二試合）・四対一、台南戦・一一対六、鉄団戦・五対五、CB戦・〇対二、六勝二敗という記録もある。竹村豊俊編『台湾体育史』、台湾体育協会、一九三三、一八一頁。

(40) 板木部長は、手記の頁の末尾に、以下の文章を添えている。「ただ、山口高商を取まく人びとのおこないに外部的にはちょっと不可解な行為が見受けられたので、罪いわれもない山口高商自身が引合に出されて、相当迷惑されたことと思う。次に掲げる経世新報一月八日『球信』の記事のごときもその一例である。あえて同高野球部のために弁明しておく」前掲(8)—二、十四頁。この記事によれば、両校に対する主催の黒洋倶楽部の待遇に大きな差異があったようである。その遠因に、山口県出身者からなる同倶楽部幹部の存在を示唆している。

(41) 前掲(28)、一五頁。なお、この寄付については前掲(5)、六〇〇頁、にも記載されている。

(42) 戸部良也「台湾野球のルーツ—能高団に始まって日本を席巻した棒球史—」ベースボーロジー五、二〇〇四、一六九—一八三頁。

(43) 一年目は彼らは活躍できなかったが、二年目には予選の京滋大会を勝ち抜き、平安中学校は甲子園に初出場した。神門晴之編『ふる里の野球—近畿編—』、ジェーピー出版社、一九八二、一—四五五頁。平安高等学校野球部史編集委員会編『平安野球部史』、一九八五、二〇頁。

(45) 大島有史『韓国野球の源流—玄海灘のフィールド・オブ・ドリームス—』、新潮社、二〇〇六、六七頁。

(45) アレン・グッドマン「野球」、（アレン・グッドマン編『スポーツと帝国—近代スポーツと文化帝国主義—』、昭和堂、一九九七、一—二三三頁）。坂上康博『権力装置としてのスポーツ—帝国日本の国家戦略—』、講談社、一九九八、八六—一一五頁。

(46) 立命館大学学友会体育会・体育会の歩み編集委員会編『体育会のあゆみ』、一九六〇、八一頁。なお、上海遠征については、体育会「上海遠征記事抄録」・SK生「野球部上海遠征記」・杠欣一郎「野球部上海九州遠征戦績」、立命館学誌一五五、一九三二、九―二二頁、の報告がある。

（立命館大学文学部助教授）